

P4C japan 6月ミーティング記録

日時：6月25日 土曜日 17:30～ 場所：大阪大学中之島キャンパス

出席者：大学教員1 大学附属中等教育（高校）1 中学校1 小学校6 支援学校1

その他1（私学教員・学園史編纂）

記録：辻村

①ワークショップについて（8月6日 神戸大学附属中等教育学校）の大枠についての検討

②事前にメーリングリストで配布されていた西宮市立甲陽園小学校・6年生「人権教育研究授業」記録の「授業映像」を視聴後、授業担当者作成資料などを参考に対話。

●教材：『ふたりはいつも』『おちば』アーノルド・ローベル著

●ねらい：「相手をおもいやることは」という問いに主体的に仲間と対話することで、自分自身の生き方を見つめることができる。仲間の発言を聞き、自分自身の意見を発信することで、自分の考えが深まっていく喜びを感じたり、自分と異なる意見を大切にしようとしたりできる。

●指導観：1時間目「おちば」を読み、自由に感想を出し、対話しながら「問い」を見つける。

2時間目：子どもたちの発言をカードにまとめ黒板に貼る。

担任のファシリテートにより「相手をおもいやることとは何だろうか？」という「問い」で対話が展開。

③対話

・「思いやり」につながる子どもたちの「経験」から対話が始まる。このような展開は当たり外れが大きい。教師集団で道筋をつける必要が出てくる。

・39人を一重の円で対話させているのがすごい。45分の授業を上手く使っている。

・担任の敢えてフェイズを変えるファシリテートは効果的であった。

↓

・事前に学年の教師で時間をかけてシミュレートした成果（指導案は、練りに練った）。

×

・いろんな「言葉」につながっていった、こんなに「語る」児童たちがいることが驚き。

・板書で「思いやる」を「ある人が、他者に思いを〈遣る〉（渡す）」と説明した児童に対しての感想が複数の参加者から述べられた。また、「遣る」の板書を受けた他の児童が、シャボン玉のメタファーで「思い」を受け取っても「割れる」ことがあると発言したことへの驚嘆など、児童の対話に対する感想が述べられた。

↓

・話していない子どもたちはどうでしたか？という質問に対し、授業が終わった後のワークシートはきっちりと書かれていたというレスポンスが担任からあった。

児童たちは、話す／聴くのが好き。

④人権の研究授業として

- ・実際の研究会に参加されていた先生からの、他校からの参観者の反応の紹介に対し、記録者は「われわれとは違う次元（大げさに言うとパラダイム）で人権・道徳を考察／実践している方々からは、我々の活動は理解されていない／理解したくない（「敬して遠ざける」）のであろうな」というイメージを持った。
- ・問題行動の主体である児童（A児）に対する女子の発言（A児の怠学的傾向に対する注意は「思いやり」であるというような）もあった。
- ・A児の存在前提の「人権授業」でもありその発言を受け、直ぐA児に担任が発言を求めたことに対し：少し時間をおいてから、彼にふったほうがよかったのでは？1人か2人発言を入れてから、彼の発言を求めるほうがよかったのでは？というサジェッションもあった。

⑤展開

- ・カードを床において、対話を纏める／方向性を確認する授業方法は良かった。
- ・経験／概念の双方向の提示があるから、面白い。
- ・生活言語ではない言語体系を学校文化圏（家庭とは違う言語空間）で修得させることの仕掛けとしてのP4C。
- ・哲学的対話による主体の変容／メタモルフォーゼ（窯変？）を絵画／文書で表現させることの重要性。

⑥その他

今回、山梨県都留市の公立小学校の先生が遠方から参加されていた。

子どもたちの感想を全て「板書化」された授業に対し、「板書は少なくともよい。最初是一緒に楽しめばよい。」というサジェッションがあった。

また、この先生の「悪戯など悪事をカムアウトしたときの対応をどうすればよいか？」という質問に対しては、「その場は、やり過ぎし、後から個別に対応するのがよい」という回答がベテランの実践者からあった。

以上